



カー（井戸）の話

謹賀新年。みなさんはどのような年を迎えましたか？今年には希望に満ちた一年にしたいですね。

さて、新年の行事といえば、年始しまわ回りではないでしょうか。そこでしばしば話題になるのが、旧正月のワカミジ（若水）の話です。

若水とは、元旦の早朝、子どもたちが村のカー（井戸）から汲んだ水を家に持ち帰り、ヒヌカン（火の神）などに供え、主婦たちが家族の健康を願うものです。西原町ではそれに加え、若返りの水として、顔などを洗っていたといえます。この行事は近年みられなくなりましたが、以前は井戸と人の生活が密接みっせつに結びついていました。

そこで今回は、町内に残る井戸をご紹介したいと思います。

イフォーウカー

字内間のカヤブチ御殿横にあるイフォーウカーは、縁結えんむすびの水であるといわれ、一丁いちぢょうビチ（結婚式）の時にはこの井戸水を使ってい

たそうです。また、字森川にある一貫いっかんガールも同じように使われていたといえます。

ユンブシガー

我謝集落の西

側、運玉森の北側に位置するユンブシガーは「エボシガー」（鳥帽子泉）ともいわれ、長方



ユンブシガー

形に掘り込また井戸です。この井戸は、一七二二年に編纂された『琉球由來記』きゅうりゅうゆらいきに天女伝説として記されています。その内容は、古波津こはつ通也とちやという小波津出身の男が水浴びをしていた天女の羽衣はしほを隠し、天女と結婚。後に羽衣を隠したことを知られ、天女は子どもを連れ天に帰ったという話です。また、その他にも聞得大君ききえおおのみ（琉球王国最高の神女）らが二、三月にユンブシガーで祭祀を行ったということも記されています。

今回は、二つの井戸にまつわる話でしたが、町内にはまだ多くの井戸があり、それぞれに伝承があります。今度、自分が住んでいる地域の井戸巡りめぐをしてみてください。